

---

# 銀城学園物語

佐乃海テル

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

銀城学園物語

### 【Nコード】

N8150A

### 【作者名】

佐乃海テル

### 【あらすじ】

主人公三条カナメは、人と関わるのが苦手且不登校も経験しているはずの神山みなみが生徒会副会長選挙に立候補して、当選したことに驚きを隠せなかった。だが彼の驚きはこれで終わることは無く、彼女の陰謀が彼の前で次々と起こるようになる。そして……。 1月20・21日に大幅改稿を行いました。不可解な部分や意味不明の西高表記を訂正しましたので、興味のある方や初めての方はどうぞ。

## プロローグ

その日の生徒会もいつものどおりの賑わいだった。

「高一A」

「特に問題ありません」

「高一B」

「暖房の修復を早めをお願いします」

「高三C」

「特にありません」

「高三D」

「こちらからも特に無しです」

生徒会長であるカナメは皆を一瞥するところ言った。

「最後に委員より連絡は？」

「はい」

手を上げたのはクラスメイトの水川だった。

「先月辞任した副会長の後任人事の件です」

「あー、わかった。近く公示しよう。全校対象でいいですね？」

「いいと思います」

「わかりました。今度の朝礼で話しましょう」

もう一度意見を促したが出なかった。

「それではこれにて閉会とします。お疲れ様でした」

三条カナメは銀城学園高校二年生。生徒会長であることを除けばどこにでもいる普通の高校生である。もともと学級委員肌であったことや、級友からの指名で去年も生徒会委員をやっていたことから

選出された。生徒会長といっても他の学校ほど忙しい訳でもないし、逆にこれと言った強い発言権も無い。もちろん普通の生徒に比べたらその意見は参考にされることなどもあるが、風紀などの面についてしかその効力は無い。

カナメは書記から今日の議事録のコピーを受け取るとそれを鞆にしまい、生徒会室を出て鍵を閉めた。職員室に戻し家へ帰ろうとする。そこには水川が待っていた。

「あれ？待ってたの？」

「うん。そんなにかかるわけじゃないだろうと思ってたし」

二人は同じ帰り道についた。

「次の副会長、誰になるんだろね」

不意に水川が切り出す。

「うーん」

カナメの頭に特に答えは思いつかなかった。それを悟ったのか、

「まあ、嫌でももうすぐわかるよね」

と水川はその話題に終止符を打った。

2週間後。生徒会室。

その後各クラスからの立候補者の書かれた紙を1クラスずつカナメは読んでいった。たいていのクラスは白紙だ。たまに立候補者がいる。それでもカナメが驚くメンバーではなかった。生徒会委員経験者だったり、明るくて積極的な生徒が多いからだ。

カナメは2年C組で目を止めた。

「神山……みなみ？」

神山みなみは2年C組の生徒。クラスは違うが、出身中学は同じだった。ほかの立候補者と決定的に違う点は中学のときにいじめられ、不登校や保健室登校を経験しているということだ。そんな生徒が副生徒会長……。どう考えても不自然だ。いたずらや本人の意思

と無関係な立候補ではないかと心配になり、カナメは神山がいるであろうC組の教室のドアを開けた。

「神山さん」

窓際の席にいい姿勢で座り外の景色を眺めていた神山は意外そうな顔でカナメを見た。

「副生徒会長の立候補の件なんだけど、これは君本人が立候補したの？」

「はい」

「そうか……。明日の朝礼が演説会だって知ってる？」

「はい」

「朝礼で演説できるの？」

「大丈夫です」

彼女は安心させるかのように微笑んだ。

「じゃあ、頑張ってくれ」

どうやら本当のようだ。カナメはとても不思議に思ったが本人が希望していることをやめさせるわけにもいかず、生徒会室に戻った。

「おはようございます。銀城学園生徒会本部です」

半年前は不慣れだった朝礼での話も、少しずつ慣れてきた。

「今日は副生徒会長選挙に先立って、各候補者に演説をしてもらいます。候補者はすべて2年生、男子2名、女子3名の候補者が出てくれました」

高2の野次馬組から歓声上がる。

毎年のように演説会は進んでいった。違うのは前副会長の辞任により2回目の演説会であること。そしてもう1つ。

「はい、ありがとうございました。最後に2年C組の神山みなみさん」

神山は静かに壇上上がった。

それまでまともに演説を聞いていなかった生徒たちも静まった。

「こんにちは、2年の神山みなみです。この度は副生徒会長選挙に出馬することになりました」

「ここから声音が変わった。」

「私が掲げる政策は、ずばり風紀強化です」

強い口調で告げられる言葉に生徒のあちこちからざわめきが起った。

「こうしている間にもこのようにざわめきが起こっています。このような空気を銀城学園から消し去らない限り、校長先生をはじめとする先生方の目指している銀城学園はできません。具体的には朝礼の生徒会委員の配置、校門の遅刻監視員、校則罰則規定の強化です」

「……」

カナメの経験からして、生徒会幹部のタイプは大きく3つに分かれる。生徒寄りのAタイプ、中堅派のBタイプ、そして教師・学校寄りのCタイプである。選挙には教師は参加しないため必然的にAかBタイプの人間が当選し、Cタイプの人間は当選しない。彼女は どう見てもCタイプだ。

演説は終わった。もちろん普通に考えれば神山は落選だ。だがカナメはもう感づいていた。落選することを分かっている人間がある。強い口調で演説をするわけがない。そしてきっと神山みなみは副生徒会長になるのだ、と。

## プロローグ（後書き）

初作品です。1週間、2週間程度ずつ連載をしていこうかと考えて  
おります。ご意見・ご感想お待ちしております。

「本日の生徒会を始めます。礼」  
「えー、本日より新生徒副会長が参加します。気持ちを一新して議論を重ねていくこととしましょう」

カナメの隣の副会長席には神山みなみが座っていた。

あれから副会長選挙が行われ、結果はカナメの予想通り神山の圧勝だった。無記名投票のため誰が神山に投票したのかも分からず、生徒たちがお互い神山に投票したのではという疑いを掛け合って終わった。

「この表を見てください。今年度に入ってから遅刻者数が多すぎます。校門に遅刻監視員を設置、まずは遅刻常習者をリストアップしたいと思います」

2年生である神山に逆らうことができるのは2年生だけだ。1年生は年下という名目上反論ができず、3年生も実権を持っていない。このような状況を改善したいとカナメは思っているが今まで特に誰かが圧政を敷くことは考えられなかったし、実際無かった。ところがここにきて状況が一変したといえる。

神山の遅刻監視員制度は満場一致で可決した。

この日の帰りもカナメは水川と一緒に帰った。帰りの途中、水川はため息をついた。

「遅刻監視員ねえ、またこれで我々の仕事が増えるわ」

「とはいえ神山の言うことに間違いないという間違いは無いからな」

「まったく……著しく教師側に味方する生徒会委員・生徒副会長も珍しいわね。顧問教師すらもない生徒会なのに教師に媚を売って何が楽しいのかしら」

「うーむ」

2人の足取りが一步、一步、校門に近づく。校門を出たその時。

「あら、ご意見かしら？」

二人は足を止め、顔を見合わせ、後ろを振り向いた。そこにいたのは神山だった。

「ご意見はきちんと議論中に言っていたかどうか、反対票を投じてもらうかしていただかないと困ります。賛成票を投じておきながら帰り道で悪口とは卑劣です」

やはり神山の口調ははつきり選挙前と違っていた。さらにいえば演説をしたときの口調だった。水川はとりあえず釈明する。

「ごめんなさい。でも今までの神山さんを考えると少し驚いて」

「今までと違っていて何が悪いというの？」

「お、おい、二人ともやめないか」

カナメが間に入るが、それを神山は押しつける。

「私は単に副会長として自分の掲げた政策を実行しているだけです」

「偉そうに……保健室登校の身分はどこへやら」

水川のこの発言を聞くと神山は固まった。

カナメはまずい雰囲気を感じ知した。せずにはいらなかった。彼女の殺気とも取れるオーラ。カナメも体が震えはじめた。

「お、おい水川、今のは無いだろ。言っていることは、た、正しいんだ。謝れ」

水川は口を開こうとせず、神山は黙って帰り道の坂を駆け下りてしまった。

神山の目には涙が溜まっていた。

その次の日。カナメはC組をのぞいた。神山は出席していた。しかしこの間の昼休みの時と同様に窓際の席で外の景色を眺めて……はいなかった。

なんとあろうことか、女子大勢の中心になって話しているではないか。もしかしたらまた不登校になってしまうのではないかと真面目に心配していたカナメはホッと胸をなでおろしたものの、少し不思議というべきか何ともいえない違和感を感じた。それを口に出すとまた昨日の二の舞になると考えて口には出さなかったが。

カナメは神山に近づき、話しかけた。

「昨日はごめん。水川があんなことを言っつて。僕が止めに入らなかつたのが悪かった」

「あら……ちよつと生徒会の話みたいだからごめんね」

そう女子大勢に呼びかけると彼女は場所を移そうと目で合図してカナメは廊下に導いた。

「三条くんは悪くないわ。安心して。それに私の考えも少し固かつたかもしれない」

カナメは本日2回目の安心をした。少し目をそらして廊下の窓の風景に視点を移した。

「でも私はこの考え方はやめない。選ばれたからこそ、絶対」

カナメは顔を再び神山に向けた。その口調は演説の時とやはり同じだった。

「そうか。まあそういう空気も大切だよな」

「三条くん、私が立候補したことに驚いてるでしょう」

「ん」

そのような話はいずれしたいとは思っていたがこんなに早く、しかも彼女から来るとは思わなかった。

「まあ、うん、同じ中学校の生徒として考えると少し驚いたな。向いているとは思っけど」

「本当にこれまでいろいろなことがあったわ。本当にいろいろ。私はねそういう人に恩返しをしていきたいなと思って。三条くんもその一人」

「え？」

カナメは自分と神山との出来事の歴史をさかのぼって見た。しかし神山が先に答えを告げた。

「覚えてないの？私を励ましてくれたじゃない。中3の学級委員やつてたとき。わざわざ家まで来てさ。あれが無かったらこの高校にもいなかった。それにこうやって生徒会委員として肩を並べられるのも嬉しい」

「そんなことしたな。まあこうやってみんなに溶け込んでいるんだから何よりだ」

「学校に復帰しても三条くんをはじめとするみんなが手助けしてくれたおかげで、本当に楽しく過ごしてきた。まあ……水川さんみたいな人も同じくらいいるけど」

「……」

一瞬の間が、空いた。

「高2になってから普通の生徒並みに過ごせるような体質にもなってきたし、いろんな人に決着を付けたいの」

「決着？」

「あ」

少し驚いたような顔をした後、

「なんでもないの。とにかく」

「うん」

「することをしないと生徒会を離れられない。三条くん、本当にありがとう」

「ああ」

それからも他愛も無い話を少しした後、おのおのの教室に戻っていった。

次の日から遅刻者取締りは始まった。遅刻者には遅刻点が追加さ

れ、これが3を超えると罰掃除をくらうというものだった。案の定  
守ろうとする人物など一人もいなかった。しかしカナメはこの取締  
りの本当の恐怖を後々知ることになるのだった。

1 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。  
ご意見・ご感想お待ちしております。  
では。

「本日の生徒会を始めます。礼」  
 「えー、本日は遅刻監視員制度の意見と今後の対策等を話したいと思えます」

神山みなみが成立させた遅刻監視員制度だったが、生徒の大半が罰則を無視する事態が多発し、取締りとして成り立っていなかった。今日の生徒会はズバリ遅刻監視員制度の対策 と名目上銘打ってはいるが、ほとんどの生徒会委員が今日の生徒会はこの制度を廃案にする会とらえている。実用性の無い案のために無駄な体力を使わされたことに対する、一種の怒りが神山の視線に目いっぱい注がれていた。

ちょっとした間にカナメは隣の神山を見た。

「（彼女には悪いがこのままではこの案は廃案になってしまうだろう）」

力強い公約で突如躍り出た元不登校児の副会長をカナメは気の毒に思わずにはいられなかった。どう考えてもこの案は無茶が過ぎる。いくら生徒会といっても生徒に暴力をふるうなどをして、何としても規則に従うことを要求するのは不可能だからだ。

ところがどういいうわけだろう。彼女は別に動揺することなく、平然を装っている。それどころかカナメの目には、落ち着きを通り越した余裕が感じられた。

「えーと、意見は？」

カナメが制度案に対する意見を求めると皆、待つてましたとばかりに拳手した。

「じゃあ、1年D組」

「正直こんなことをしている学校は他に例を見ません。この案の方向性は素晴らしいと思いますが、方法が実用的でないと思います。撤廃すべきです」

「……わかりました。他には」  
言ったと同時にまた次の人が挙手した。カナメは心の中で苦笑した。自分に損になる案、反対意見の時はよくもこんなに活発に意見が出るものだ、と。

「2年A組」

自分のクラスだ。案の定水川だった。何か起こらなければいいのだが、とカナメは思ったが指名したのは自分であり、時すでに遅しと諦めた。

「この案には問題点が複数あります。まず第一に……」

長い論理を展開し始めた。こんな長い話を平気で即興で作れるから生徒会委員になれたのかもしれない、とカナメが感じたほどだった。そしてこの論理展開はこの案だけでなく、副会長としての神山みなみの存在も認めない、という力を発していた。

水川の演説中も神山の表情は落ち着いていた。水川の精一杯の皮肉も神山にはひとかけらも届いていないような、余裕。

「さて、一通り意見がまとまりましたね。とりあえず発案者の神山さんから何かありますか」

「……」

神山はぐるりと生徒会室にいる委員を見回した後、口を開けた。

「すみませんでした。皆さんの意見、私が実際に監視員として見た側としても、実効性に欠けた案のように感じられました。考案の段階での話し合いが足りなかったようです」

意外とあっさり謝ったことには、皆もカナメも驚いた。演説にしても立案にしても、あの口調からして滅茶苦茶な反論をしてくるに

違いない。そうしたら皆で徹底抗戦するまで　そう考えていたからだ。緩やかに廃案で向かっていく流れになるだろうと、皆安堵の表情を浮かべた。

ところが神山は皆の驚きをこれで終わらせてはくれなかった。

「そこで、もう一度案の根底から考え直してきます。そして来週も一週間の試験実施を提案します」

皆固まった。構わず神山は続ける。

「よろしいですか、会長」

カナメのところにも火花が散ってきた。どっちの火花を浴びればいいのか。彼は決断をやむなくした。

「じゃあ、もう一週間だけ」

「何考えてるの!？」

予想していた水川からの火花は帰りの職員室前に、意外と早く訪れた。

「何であんな女の案を！　あなたさえ反対すれば、廃案になったのよ！　事の重大さわかってる？」

「ここで言うな。言いたいことがあるなら生徒会で言え。この間の二の舞になったら面倒だ」

「何よ、もしかしてあの後謝ったりしたの」

水川の顔がふてくされていく。

「当たり前だろ。学校だけでなく生徒会の風紀を守ることも、生徒会長の役目の一つだろ。まあ、あの場合は風紀というよりは空気と言うべきかもしれないが」

「余計なことしないで結構」

神山のことを何も分かっていない水川の態度に、カナメの憤りは限界点を突破した。

「だったら始めから余計な揉め事を起こすな！」

水川はカナメが初めて声を荒げたことに驚いていた。

「そんな、そんなに怒らなくたって」

水川も、カナメも何も言えない。

「……」

校門で二人は反対方向に別れていった。帰り道の方は同じのはずなのに。

そんな二人を、愉快とも不愉快とも取れる表情で彼女は見ていた。

次の日登校したカナメを神山が訪ねてきた。

「昨日はありがとうございました」

「ん、ああ、試験実施のことね、いいよ別に」

そう言いながらカナメは遠くの水川のほうをちらりと見た。あちらはいつにもなく不機嫌そうだ。

「絶対、この案が学校のためになるように策を練りますから」

「まあ、僕は会長だから中立的立場にいなきゃいけないわけだが、その姿勢とやる気は応援するよ。頑張れ」

「はい」

週が変わり遅刻監視員制度の再試験が実施された。神山が考えたのは遅刻点が3以上になったら、朝のホームルームに担任を通して個人で呼び出しをかけるというものだった。確かに以前よりは実用的になったとはいえる。

「今週末の生徒会はどうなるのやら……」

カナメの不安は胸の中でどんどん膨らむ一方だった。

2 (後書き)

ご意見・ご感想をお待ちしております。次回軽い戦闘が入るかも  
れません。

その日の神山は一人目の呼び出しをし、屋上の面談室で生徒を待った。

その生徒は同じ中学の出身である山岸だった。つまり彼はカナメと同じ中学の出身であり、またカナメに生徒会長になるように勧めた張本人である。ただ彼は遅刻が多く、前回の取り締まりの時も罰掃除をサボった。

しかもカナメに、

「おい、神山のあのふざけた取り締まりやめさせるよ。だいたいあいつ生意気なんだよな。いじめられっ子の弱虫のくせに」と言った。カナメは神山側の弁護をしてくれたが、それだけでは神山の怒りはおさまらなかつた。

「(……決着を付ける)」

山岸が面談室に入ってくると、彼女は勝利の笑みを浮かべた。「手短に終わらせてくれよな。こっちだって昼休みヒマじゃないんだ」

山岸はぶつきらぼうに言い放った。

「ええ、もちろんこっちだって手短に終わらせたいわ。でもそれもあなた次第よ」

神山はにっこり微笑んだ。

「いいからさっさと用件を伝えろ」

「罰掃除をしなさい」

「嫌だ」

「これは生徒会としての命令です。逆らったらどういうことになるかわかりますね」

「この弱虫が、生徒会の盾使って何威張ってんだ！」

山岸は拳を振り上げ、すばやく神山の頭に降下させようとした。ところが、神山はいとも簡単にその拳を手でつかんだ。そしてつかんだ拳に人間技とは思えない力が加わる。

「お、おい！ 離せ！ 手が！」

「手がどうしたの？ ふふ」

神山が握り続けている山岸の拳からはとうとう血が流れ出し始めていた。

「てめえ……」

神山が拳を離すと山岸は心から怒りを感じていたのか、面接室の掃除用具からほうきを出すとそれを神山に向けて力いっぱい突き出した。

「そんなのパフォーマンスにしなければならないわよ？」

山岸の手が、硬直した。

「う、動かない！」

「ほら、私をボコボコにしてみなさい。中学のときのように！」

神山のこの発言にだけ、今までの余裕が消えているように見えた。

「すまなかつた。頼むから許してくれ」

「そんなこと言ってもね、あなたの罪は軽くないわよ。あなたは、生徒の風紀を統括する銀城学園生徒会に逆らったのよ？ それも今の私は副会長、この学校の風紀を2番目に牛耳っている生徒と言っても過言では無いのよ」

「それをわかって言っているんだ！ 頼むから許してくれ、副会長

！」

「ふん」

不機嫌そうに、でも何かが晴れたような口調で神山は

「じゃあきちんと、放課後の罰掃除しなさい」

と言い、山岸への攻撃をやめた。

神山が先に面接室を出ると、山岸は神山が出た後の扉をじっと食

い入るようにつめた。そうして何秒か経ってから力いっぱい蹴った。それでイライラが解消されたのか、部屋を出た。

山岸はA組に戻ると、真っ先に弁当を食べ終わりのんびりしていたカナメに声をかけた。

「おいカナメ、生徒会委員の首切りってどうやるんだっけ」

「ああ、罷免か。罷免は全校署名30人以上、ただし最低でも各学年5人以上」

「どういうことだ」

「だから2年生30人じゃダメで、1年生5人、2年生20人、3年生5人とかじゃないとダメってこと」

「なるほど。サンクス」

「おう」

そこまで、自然にカナメは生徒会長として答えた。

「ん」

山岸のクラスメイトとしてのカナメに戻って、事の不思議さにようやく気がついた。

「お前今何ていった」

「え？だから生徒会委員の罷免の話」

「何故」

「何故って……」

一度山岸はクラスを見回した。当然ながらC組の神山はA組の教室にいなかった。それを確認してカナメの質問に答える。

「神山に暴力ふるわれたんだ」

「はあ？」

「この傷見るよ」

そういつて山岸は右手の手のひらから流れ出している傷を見せた。「確かに傷だが」

どう考えてもいじめられっ子だった神山がこんなことをするのは

カナメには考えられない。

「お前、それ自分で付けたんだろ」

「違う！ 断じて違う！」

「根拠もなく強気だな」

「本当に違うんだ。こればかりは信じてくれ」

「お前の日頃の生活態度が逆に根拠になるぞ」

「それは百も承知だ。確かに俺は遅刻の常習犯だし、反省もしていない。先週試験実施された罰掃除の制度も完全に無視した。でも、でもこればかりは本当なんだ。ちよつとカツと来てあいつを殴ろうとしたら、俺の拳を防いでその拳をつぶすような強さで握ってきたんだ。で、この有様だ」

カナメはふう、と溜息をついてから

「悪いが」と口を開けて

「それは信じられないな」と言った。

「俺らは中学からの親友だろ？」

「それとこれとは別問題だ。しかも今の自分の役職は生徒会長、うかつに誰かの肩を持つわけにはいかんだよ。だから別に神山の味方をしているわけではない。これでも中立的立場だ」

二人の間にしばしの沈黙が流れる。

「私は、山岸くんを信じるわ！」

割り込んで来たのは、水川だった。

「普通に考えてこの傷は自分でやったものではないことは明らかだわ。見ればわかるじゃない。たとえば……」

またしても水川は論理を果てしなく展開しはじめる。それを遮るようにカナメは

「分かったから。そんなことはどうでもいいんだ。別に俺だって山岸を信じていないわけじゃないんだ」と言った。

「信じられないと言ったのはどこのどなたかしら？」

「そ、そうだそうだ」

カナメは二人の攻撃がだんだんと鬱陶しく感じられてきた。しか

もいつも困った自分を手助けしてくれた水川が、山岸の肩を持っているのがなおさら鬱陶しさを強調させる。

「じゃあ、罷免署名すればいいじゃないか。それは一般生徒と他の生徒会委員の権利として認められていることなんだから」

「……そうね、じゃあ山岸くん、早速署名活動始めましょう。」

「お、おう」

二人はカナメから無愛想にも離れたが、なんだかカナメはスッキリしなかった。別に神山の肩を持っているわけではないのに。

変わったことに罷免署名は私的に署名をするのではなく、生徒会側に申請をしたあと朝のホームルームに署名用紙が配られ、それに署名をするか空白にするか、という形式である。それを後ほど生徒会長のみで、開票を行う。生徒会長の罷免署名の場合は、副会長が開票を行う。それに向けて水川と山岸は申請の準備を整えることにした。

その日の帰りのことである。罰掃除を終えた後山岸は帰路についてた。

「山岸くん」

その声を聞いて山岸は寒気がした。この覚えのある寒気からして、もしかと思うと予想通りの人物がいた。

「なんだよ。罰掃除ならきちんとやったぞ」

「罰なんだから当たり前でしょう？ さも偉業を成し遂げたかのようには言わないの」

「何の用なんだよ。早く帰りたいんだけど」

「別に用はないわよ。ただ、一言言っておこうかしら」

「何だ」

「どうやら水川さんと団結して私の罷免署名を企てているらしいじゃないの」

「それがどうした。悪いか？」

「悪くは無いわ。大いに結構よ。それは生徒として当然に認められている権利ですもの」

「ならいいだろ。あばよ」

構わず、山岸は歩き始めた。神山は追いかけてようとはせずその場で口を開いた。

「どれほどの人が、私の罷免に署名をくれるのかしらね、楽しみだわ」

山岸の足が止まった。今度は神山が構わず帰り始める番だった。

3 (後書き)

今回は少し長めで申し訳ございません。  
次回も神山みなみは大暴れします。お楽しみに。  
ご意見・ご感想をお待ちしております。



カナメの予感はずいぶん昔から、良くも悪くも当たってしまったのだ。

「第二点は、今週再試験実施した遅刻監視員制度についてですが」

カナメは水川に向き直り、

「皆さんから見た今回の効果はいかがだったでしょうか」と言った。

すると水川は不機嫌そうにも

「罰掃除には皆参加していました。神山さんの個人面談の効果は否めません」

と答えた。

「ありがとうございます」

神山が形式的な礼をする。

「じゃあこの案は通して構いませんね」

カナメの提議に反対できるものは一人もいなかった。

生徒会が終わった後、持ち帰らなければいけないものがあつたカナメは自分の教室に向かった。するとそこには放課後練を終えて、テニスラケットをしまっている山岸がいた。

「よう」

カナメは山岸と反対方向のロッカーを見ながら言った。すると山岸は当然の質問を繰り返してきた。

「神山の署名は、どうだった」

ロッカーからゆっくりと水彩画セットを取り出すと、黒板側に立っている山岸を初めてしっかりと見つめ、答えた。

「神山は今日の生徒会に最後まで出席していたよ」

「そうか」

山岸はそんなに驚いた様子も見せなかった。

「あっさりしているな、お前は」

カナメは続ける。

「もう少し、悔しがったり、怒りを噴出させたってよかるう」

「なんかさ、もうあいつに何も及ばないんだよね」

「ん。どういうことだ」

カナメも同じように、最近感じてきたそのこと。

「だいたいさ、署名でクビが確定しちゃうような人が、あんな絶対的な自信持たないんだよね」

「そうだな。あの自信はどこから来るのやら」

カナメでさえも語尾には笑いを含んでいた。

「三条、まあ俺の署名活動は失敗に終わったことはどうでもいいんだ。それは別に予想できていなかったことでもないし、さっきから言っているように逆にそうだろうなと思っていた」

「何が問題なんだ」

「問題と言つか、三条は神山が怖くないのか？」

「え」

カナメの驚きをよそに、山岸はまだ続ける。

「神山はこれからどれだけの人を不幸にするんだ？ いや」

少し間を空けた。

「どれだけの人に復讐をするんだ？ この復讐劇はいつまで続くんだ？」

「……」

「答えてくれよ、生徒会長。俺はそれが分からないとたまらなく不安なんだ。自分が傷つけられたのは一向に構わん。でもこんな怖いことがいつまで続くんだ？」

「まあ、待て」

カナメの頭の整理はまだ付いていなかった。

「復讐つてなんだ」

そこから考え直す必要があった。

「中学のこと、思い出せるか？」

山岸は聞いた。

冬、暖房がシューツと音をならし、湯の入ったやかんまでも生徒に混じって白い息を吐く、中3の教室。それ以外に響く音は鉛筆の音のみの中3の教室。

「いよいよ追い込みだ。心してかれ」

こんなに頑張ったって学区内に入っている高校などほとんどが県立高校、東西南北のどこの方向に向かうかの違いだろう、誰しも思っているながらも中学の持つ重い歴史に逆らう者はいなかった。教員の叱咤激励が時々ぶつかる教室。

こんな中に若者が閉じ込められていては、ストレスもたまる。その矛先は矛に一番合う人間が選ばれる。

「んだよ、神山、また泣くのかよ」

上履きが無くなったり、教科書が破られていたり、学級委員である三条カナメも見過ごしてはいなかったが、教員に言っても

「まあ、今は追い込みの時期だから、みんな焦っているだろう、大目に見てやれ」

と言われるだけであった。

ある日、神山が女子からも嫌がらせを受けていたとき、教員に報告しにいったカナメはいつも通りのことを言って逃げるばかりだった。

「じゃあ先生」

「うん？」

「受験が終わったら解決してくれるんですか。受験が終わったらすぐ卒業なんですよ？ 中学もまともに過ごせず、高校でもやっつけていると思いますか。高校まで先生が面倒見るんですか」

「まあ、待て三条」

「『受験』っていう言葉は難しい問題から逃げるための魔法の呪文なんですか？ 何か面倒なことがあると、『受験』、『受験』って言えばいいんですか。僕らの模範である先生がそういう逃げ方をし

ているなんて、とても情けないです」

「だいたい、お前は成績もいいんだから、そんな余計なことを考えなくても」

「どこが余計なんですか」

「まあ、いい。今日は早く帰れ」

この日も一方的に、話を打ち切られてしまった。負けた。カナメは唇をかみしめる。

それから1ヶ月が経った。とうとう神山が学校に来なくなっても半  
月が経っていた。

「あいつがいなくなつて、つまんねえな」

クラスのうちこちから聞こえるその言葉は、神山に向けられた同  
情の言葉では決して無い。まるで、近くのゲームセンターが潰れた  
かのような口調。

カナメの帰り道、その中の必ず通る道に神山家はある。1日2回、  
そこを通るたびに胸が苦しくなる。

ある日カナメは勇気を出してインターフォンを押した。少しでも  
多く神山と話してみようと。応答した母親は暖かく出迎えてくれた  
が、当の神山は暗い顔をしている。

「神山」

「……」

「お前はどこの高校に行きたいんだ」

「……」

「お、俺は銀学だ」

空しいヒトリゴトになっていることは自覚していた。でも止めた  
らいけない、止まってしまう。口を動かし続けることだけに必死に  
なっていた。

「銀学は、さ、何ていうんだろう、自由な校風らしいんだよね」  
「そう」

ほんの少しの応答が返ってきた。この言葉がこのときのカナメにとつてどんなに嬉しい響きだったか、考えることは想像に難くない。それから銀学の魅力を、カナメは神山に語っていた。

「あー、俺はすっかり話してごめんね。本当に志望校無いのか」  
「無かった」

神山の過去形の言葉。次の言葉を早く聞きたい、とうとうずずずするカナメ。

「銀学、行きたいわ。わざわざ私の様子を伺ってくれる三条くんのおすすめなら、間違いないわ」

初めて笑顔を浮かべてくれた。その時の笑顔はとても素朴で心安らぐものだった。

「そうか！　じゃあ一緒に頑張ろうぜ」  
神山は強く、うなずいた。

それからの神山の中学生生活は劇的に変化した。いや、カナメが劇的に変化させた。

学級委員というキャラクターでありながらも、いじめの主犯格だった、男子組の山岸、伊藤、女子組の姉星、涼姫、春村とは仲が良かったカナメはどうにか説得をした。彼らもカナメに対しては

「そこまで頑張ったなら、邪魔するのは悪いな」  
のような感じで同意してくれた。

「そっだな」

山岸はうなずいた。

「で、今だ」

「今……」

「俺、伊藤、姉星、涼姫、春村」

「主犯格だった奴らだな」

「あの神山の顔は俺らに向けた復讐に違いない」

「まだお前だけではなんとも言えないが、可能性は認めよう」

「どいつだって、生活態度で突けるところがある」

「確かに」

山岸は遅刻、伊藤は恐喝、姉星はバイト、涼姫は乱れた服装、春村に至ってはサボリ。

「で、頼みだ三条。俺の罪は認める。もう少しの罰ぐらいなら覚悟する。だからお前にこそ、頼む。あとの4人が……もし危険に冒されそうになったら守ってやってくれないか」

「ん」

「生徒会長でかつ、神山にとって恩人の、お前にしか出来ないんだ」

山岸の目から普段のちゃらんぽらんは抜けていた。その目をじっと見つめて

「わかった。もしそうだったら約束しよう」

カナメは約束を結んだ。

神山は帰り道、コンビニに寄っていた。もちろん副会長たるもの寄り道では決してなかった。

外で一息ついていてる女性のアルバイト店員がいる。店員の制服の下に着ているのは銀学の指定セーター。神山はゆっくり、ゆっくり彼女に近づいた。

「姉星さんかしら？」

「え？」

4 (後書き)

あんまり神山大暴れしませんでしたね。  
次回こそは！

ご意見感想お待ちしております。

「じゃあな。また明日」

「おう」

山岸とカナメは校門で別れた。

「バイトは校則違反だっつてわかっていますね」

同じくらいの背なのに、神山の声は上から聞こえてくる感覚をもよおす。

「そうだけど？ だから？ 何偉そうに」

姉星は不機嫌そうに答える。

「あんた、何か当選して副会長になったみたいだけどね、調子乗らないほうがいいよ。あんたの、あの変な自信に圧倒されて投票した馬鹿が多いだけなんだから。これもね、別にあんたが嫌いだから言っているんじゃないわ、あなたを思っ言っているんだから」

「不良生徒に思われる筋は無いわ」

「ああ？ もう一度言ってみる！」

姉星は激昂して神山の胸ぐらをつかんだ。

「どうぞ。何発でも、お構いなく」

「ふん」

面白くなさそうに姉星は彼女から手を離す。

「早く帰りな。こっちは忙しいんだよ」

何故だろう、姉星は負けた気がした。さっさと店へ入っていく。

神山は笑みを浮かべると、元の帰り道に着いた。

カナメは今日一日のことを振り返っていた。中学のときのこと、これから始まるかもしれない復讐、そして約束。何よりもまず、こ

れが復讐劇でないことを信じよう。それでも復讐劇に違いなかったときは、約束を守るまでだ。

と考えに一通り整理が付いたので、カナメは歩をいつもの速度まで早めた。

すると右から神山が出てきた。

「お、神山」

「三条くんじゃないの」

「寄り道はしないほうがいいぞ、今の君は副会長だから見られたらまずい。するなら見られないように」

ごく自然な意味でカナメは神山に言ったのだ。

「寄り道ではないわ。校則を違反している生徒を見つけたから注意しただけよ」

「なんだ、そつちか。ならいいけど」

カナメは安心した。そつちか。確かに寄り道なんかするわけないもんな……ん？ 校則違反？ そつち？

「何！」

まさか、まさか、無いよな。無いだろう。言い聞かせるしか今のカナメには術が無かった。

「どうしたのよー、びっくりした」

「校則違反の生徒がいたのか」

驚きの内容をごまかす。

「そんなのいつものことでしょう。『何！』とかオーバーリアクションするほどのことじゃないじゃないの」

神山は声を出して笑った。

「そういうのを一つでも減らすのが私たちの役目なんだから。いちいち驚いている暇は無いでしょう、生徒会長さん？」

「ん？ ああ、そうだな、うん」

また神山は少し笑った。

「もう、おっかしい、今日の三条くんおっかしいよ？ 面白いなあ。何かあったの？」

あつたことはあつたが、彼女には絶対言えないことだ。

「ところで、その校則違反って何だ」

「コンビニでバイトよ。遊び金蓄える馬鹿のしていること。だいた  
い彼女の家は生活には到底困っていない、裕福な家庭じゃない」

ここまで合っている。姉星家は父は医者、母は弁護士一流家庭  
なのだ。姉星本人は庶民の女子高校生と相違ないが、兄は立派な司  
法修習生らしい。

「誰だ？」

怖いが聞いてみた。

「うちのクラスの、姉星美穂よ」

神山は心なしか、明るく答える。また一つカナメの予感当たっ  
てしまった。今回も悪い方向に。

神山と別れ、家につく。今日は宿題と言う宿題も無く、頭もそう  
いう気分にはなってくれなかったので、ベッドに寝転がった。次は  
姉星　と予言されたようなものじゃないか。

その日は何も考えられなかった。

次の日。

「うーっす、三条！」

「お、おう」

「なんだ！ シケてやがるな！」

山岸はいつもの山岸だった。ところが小声で話し始めた。

「姉星がバイトしているコンビニに神山が来たらしいじゃねえか」

「お前も知っていたか」

「これは俺が言ったことがマジになる可能性大かも知れねえぜ」

「そうだな」

「忘れてないよな、約束。守ってくれよ」

「う、うん」

どう守ればいいのか、カナメにはこれっぽっちの見当も付かない。

「本日の生徒会を始めます。礼」

「今日は神山さんから提案があるそうです」

公約通りに、アホみたいに厳しい法案を提案していく神山の鬱陶しさは生徒会委員からみたら、際立っていた。皆『提案』という単語を聞いて、眉をひそめる。

「来週から試験実施しようと考えているのは、アルバイトの取締りです」

その発言を聞いてギクリとした顔をする委員もいる。半年も会長やっているカナメから見たら、そいつがバイトをやっていることはバレバレだった。

「放課後を中心とした検挙、その後の担任への報告、罰則という方向を考えていますが」

一度そこで神山は発言を切った。

「まさか、この生徒会の中にアルバイトをしているなんて委員はいないでしょうね」

一度切るから怖さは倍増する。だが、その後の反応は意外と柔軟なものだった。

「まあ理由も諸々だと思っから、怒ったりはしないけれど試験実施期間中、家庭の事情と関係なく私利私欲でアルバイトをしている委員がいたら、試験実施期間中だけそのアルバイトは休んでいただきたいわね」

満ち溢れた自信をいっぱい染み込ませた神山の発言が、議決を迫る。

「それでは、試験実施の議決を始めましょう」

あえなく今回の案も誰も反対できなかった。

山岸の言っていた可能性はだんだんと濃くなってきた。  
帰り道。

「罰と言っていたが、どうするつもりだ？」

カナメはなんとなく聞いてみた。何となく言っても何となくではない。山岸との約束に触れないかという調査も含めて。

「そうねえ」

少し考えているような仕草をしたあと神山は答えた。

「やはり給与の押収でしょう。学校の命令に背いた給与は学校へと消えていくべきだわ。それが部活動・研究会・同好会の活動予算に回ったら、有意義な消費と言えるはずよ」

「言っていることはもつともだが、そんなことを我々の力でできるのか？ 不良でも出てきたら太刀打ちできんぞ」

「本当に困ったときは学校に直接言えばいいでしょう。ま、出来る限り生徒会の中だけで生徒会の法案に関する事は解決させるつもりだけだね」

「……なあ、神山。これは悪い勘かもしれないが」

「何？」

「このアルバイト取締り法案を出したのは、姉星を見たからか？」

「そんなこと無いわよ。姉星さん以外にもアルバイトをしている生徒なんかいくらでもいるじゃないの。それに何よ、『悪い勘』って」

「そうじゃない。アルバイトをしている生徒の中でも、姉星だったからこの法案を出したんじゃないのか。もっと言ってしまうと、アルバイトは関係なくて、姉星がやっている悪いことを取り締まるために、」

「言葉が過ぎるわ、三条くん」

確かに言い過ぎた感はカナメにもあった。

「そうじゃない。妄想するのはあなたの勝手だけど、それを人に

言つと不快に思う人もいるから、これからは気をつけて。私は気にしないけど」

そういつてカナメを置いてさっさと歩き出した。余裕の表情がまた一瞬消えていた。

5 (後書き)

だんだんと、神山みなみの陰謀が分かってきましたね。次回のはっけから、姉星と神山の対決です。

少し空いてしまいましたが、次回もお楽しみに。

かくして、次週の月曜。アルバイト取り締まり法案の試験実施が始まった。

「姉星さん」

放課後、生徒副会長・神山は例のコンビニへと歩を進めていた。

「何よ。また来たわけ？ 本当にあんたって奴は中学のときからそうだけど、鬱陶しい」

姉星はそう言いながら、面倒事を避けるために店の裏に向かった。神山もそれについていきながら話す。

「そうですか。それは大変残念です。ところで今日の朝礼の話、聞きましたか？」

「聞いてるわけねーだろ」

「『アルバイト取り締まり法案試験実施開始』」

「知るか！ お前いい加減にしねーと、本当にぶつ殺すぞ？ 世の中はな、お前が思っているほど口先だけでの理屈は通らねえ、拳がモノを言うんだよ馬鹿野郎！」

「わかっています。今、ここで痛感しています。私も分かっていますよ、拳じゃないと通用しないことくらい」

驚くべきことに、その発言を終えたとき神山の手は握りこぶしになっっており、姉星は倒れていた。

「痛え……何すんだ、クソアマが！」

これでも女である。罵声を投げると起き上がり、神山に蹴りを入れた。神山は崩れ落ちる。

「中学のときみたいになあ、お前の物をいちいち隠してるほど、こちとら暇じゃねえんだよ」

「こっちだってあの時のまま、やられっぱなしというわけにはいか

ないの」

「何？」

神山の体から発された無数の氷の矢。透明なはずの氷がみるみるうちに紅に染まっていく。

「うっ、ぐっ」

「これでもバイト出られるのかしら？　こんなボロボロの体、服装で？」

「……」

「生徒会副会長としてあなたに命令します。まず明日、あなたがバイトをやっていることを担任に通告します。その後、現在残っている給与を銀城学園に明け渡しなさい。これは命令です。これに逆らったらどうなるか、あなたは身をもって分かっていますね？　では」  
肩下げカバンを拾って、神山は帰っていった。

「こんな馬鹿がつ、通用するのっ、思ってるのっ」  
でも姉星はボロボロになっている自分を隠す術を持ってはいなかった。

カナメのほうもカナメのほうで、取り締まりはしていた。5時になったところで、区切りを付けてやめた。

「（とりあえず、あからさまで注意しても大丈夫な血の気の多くない人間は締めたが）」

生徒会長とは言えども、自分の体を危険に晒すのに躊躇をしないわけではない。他の委員には悪いと思いつつも、それだけはしなかった。もっとも、他の委員はアルバイトの取締りのきちんとしていたかというところでもない。途中でいい加減になって、ドサクサに紛れて下校する委員も多かったです。

姉星に目をつけていた神山のことだから、もうすでに姉星のところへ行っていることだろう。姉星などの、かつて神山いじめの主犯格だった人間を守るのが山岸との約束だったのに、それを守る守ら

ない以前にカナメは姉星がアルバイトをしているコンビニがある通りと逆方向の通りに取り締まりに来ていた。

カナメが、生徒会長の肩書きをこれほどに憎く思ったことは無かった。

次の日。

カナメはいつもより少し遅く家を出た。足取りも、重い。

学校に着いてみると予想通りの結果が待っていた。山岸に体育館まで呼ばれ、ついていく。

「てめえ！ 早速俺との約束を無視しやがったな！」

「何のことだ」

「姉星を見る！ あいつ今日包帯だらけで学校来ているんだぞ」

「やはりか」

「やはりか、じゃねえよ！ お前にしか守ることは出来ないと思っただから俺は頼んだんだぞ！ なのにあのザマはなんだ！ 会長さん、教えてくれよ？ あの包帯の傷は誰に負わされたものなんだ！」

カナメは山岸に強く、突き飛ばされた。

「答えてみるや！」

「それが人にものを頼む態度か」

静かなその言葉に山岸は驚いた。怒りのこもった言葉をカナメの口から聞くことはめったに無かったからだ。

「俺にしか出来ないこと、お前には出来ないこと、それを頼んだんだ。お前は何も出来ないくせに何を偉そうなことをのたまってるんだ」

「……」

「俺だって何も出来やしないことが、歯がゆいさ。昨日だって姉星のアルバイト先のコンビニがある通りと反対方向の通りを取り締まっていた。気がついたらそっちの通りを歩いていったんだ。何か恐ろしいことが待ち受けている強い予感が」

カナメは続けた。

「神山が怖いのは、今やお前や姉星だけじゃない。俺もなんだ。いつも生徒会であいつの隣に座っている俺でさえも、身が震える思いが頭の中を駆け巡っているさ」

「……」

「俺に変に大きな期待をこれ以上抱かないでくれ。それが出来ないならば、自分で解決しろ」

カナメは山岸を置いて教室へと歩いていった。

カナメは教室に戻ると、まず一番にしようと思っていたことを実行した。

「姉星」

「何」

姉星は淡白な反応を返した。

「その傷は何だ。怪我にしてはおかしいぞ」

「なんでもない」

「誰にやられた」

「誰にもやられていない」

「答えろ」

「なんでもないつつつてんだろ！」

教室の大勢がカナメと姉星のほうを向いた。

その時、山岸が教室に入ってきた。皆の注目は山岸へも向く。山岸の注目は姉星とカナメの方へ向いた。さっき突き飛ばした時のカナメの手の擦り傷から、血が滲んでいる。山岸は何も言えなかった。教室が徐々に喧噪を取り戻し始めた。

「昨日からアルバイトの取り締まり制度が始まったのは知っているか」

「だから何だ」

「昨日、お前は取り締まりを受けたか」

「……………」

『受けてねーよ』という嘘は、姉星の頭の中に思い浮かんだが、言葉にならなかつた。この包帯がそれが嘘であることを皮肉にも、証明している。

「受けたんだな」

姉星は次の瞬間黙って、頭を前にこくつと動かした。そして肝心の次の質問。

「担当は誰だつた」

「……………みなみ」

「やはりそうか。でもそれにしても、お前にしては珍しく反撃しなかつたな」

「したさ」

「したけど、すごい強かつた。なんかとどめに氷でできた矢みたいなのが刺さつてきて」

「強いと言う話は山岸からも聞いた。でもその氷でできた矢は誇張だろ？ RPGじゃあるまいし」

「ここまでできて、嘘なんかつくものか」

カナメもそうは思うが、それにしても氷の矢は非常識だ。

「非常識だと思つたろう、でもそれが今の神山なんだよ」

山岸が話に入ってきた。その目は少しカナメにすまなそうな雰囲気を与えていた。

「俺のときも金縛りにされたし」

「本当なのか」

「そうなの？」

カナメと姉星の疑問が山岸にぶつかる。

「嘘だと思うか？ 特に姉星」

「そうだね……………今の自分には信じられるし、信じるしか術は無いわ」

「で、ここから先が問題なんだが」

山岸はまた、何か考えを用意していたようだ。

「何かか誰かが、いずれにしてもあいつを止める因子を持ったもの

「が必要なんだ」

「なるほど」

「とりあえずカナメは同調しておいたが、誰もそのものについて一つも浮かばなかった。」

「ところが、姉星もピンときたようだ。」

「山岸、あんたと私、共通するのはみなみを昔いじめてたっただよね」

「その案ももう出ているし、その可能性は濃い」

「だとしたら」

「姉星はカナメの顔の方を見た。」

「そのいじめに対する復讐を止めるにはいじめを止めた三条にしか、その因子を持つているかどうかとは別として、これを止めることは出来ないんじゃない？」

「む」

「またカナメに矢印の先が向き始めた。姉星は続ける。」

「しかもあとのメンバーって、みんな銀学じゃん」

「だから大問題なんだ」

「山岸はあきれたように答える。」

「これを早めに止めないと、」

「伊藤とか、涼ちゃんとか、春村に手がのびるってこと……」

「始業のベルが鳴った。三人はただただ、立ちつくすだけだった。」

6 (後書き)

神山の次の矛先は伊藤・涼姫・春村の誰に伸びるのか？次回もお楽しみ。次回は少し間が空くかもしれませんが。

「本日の生徒会を始めます。礼」

「えーと、今日は今週試験実施した『アルバイト取り締まり法案』の意見を求め、最終的に採決を行いたいと思います」

「まずは成果のほうは……」

「またしても放課後を無駄にされた、と今にも声に出して言わんばかりの拳手の嵐。」

「えーと」

さすがにカナメも苦笑するしかない。隣の神山は余裕の表情以前に、もつとでもいいとばかりの顔。自分で案を出しておいて無関心というのも許せなく思うが、今のカナメは嵐を鎮めるので手一杯だった。

とりあえず片っ端から指名していくが、「効果が無い」「説得力が無い」「アルバイトは校則違反の中でも手間がかかる」「諦めても仕方が無い範疇」「だいたい学校に納めるなんてきくわけが……」といった意見が大多数。

この間の遅刻監視員制度の行動が行動だったので、皆の意見が一通り出納めとなると、神山のこれからの行動に皆の興味は移動する。「それでは、提案者の神山さん、ご意見を」「そうですね。少しアルバイト案は非現実的だったかもしれませんが、廃案とするのがいいでしょう。とりあえず一人検挙しましたし、一人も捕まらないという危険性もあったことからすると、試験実施にはうまくいっただけです」

今回の皆の驚きの中心は、「一人検挙しましたし」のところだった。

「ちょ、ちょっと待ってください」

一年生が拳手した。すかさずカナメは指名する。

「一人検挙できたんですか！ 誰ですか」

「個人名をここで出すのはふさわしくないとします。とりあえず2年生です」

個人名を出さなかった分、カナメは少し安心した。水川は少し不満そうだが。

「それじゃ、この案は廃案と言うことで」

久々に生徒会の不安材料がネタ切れとなり、皆ホツとする日だった。

あれからカナメは水川と一切話していない。クラスメイトとしてどころか、生徒会長と一生徒会委員という関係としても話すことがなくなっていた。

「おい、お前金も持ってないのか。そんなんで俺様と会おうたあ、いい度胸だ」

そういつて彼は男子生徒を殴った。男子生徒は教科書を抱えており、勉強好きで成績優秀そうなイメージが漂う。逆に弱々しさもまとうていた。

「や、やめてくれ。金なんか君に、あ、あげられるわけがないだろう。せ、生徒会に報告するぞ」

「生徒会？ なんだそれは？ おまわりさんか？」

また一撃が男子生徒を襲う。

「くっ」

男子生徒は気絶した。

「んだよ、気絶しやがった。困るんだよな、こういう中途半端なのはよ」

口でそう言いながらも、彼の手は男子生徒のカバンの中に入り、

財布を探し当てようとしている。

「うし、見つけた見つけた。今日はシューティングにするかな」

シューティング、とはゲームセンターで遊ぶ分野なのだろうか。

その時。

「あら、見つけた」

かくれんぼで鬼を見つけた女の子のような、おどけた声を出した  
女子生徒　それは神山だった。

「あ？　神山か。お前副会長だったよな。なんだ？　お偉いさん目  
線でなんか言うことでもあるのか」

「別にないわ。でも……これは良くないわね？　恐喝は犯罪よ？

生徒会から教員に報告書を出そうかしら」

「うるせえんだよ」

先ほどまで神山の顔があつたところに、彼の一撃が飛ぶ。しかし  
そこに神山の顔は無かった。

「なんだ？　柔道でもやったのか。正確に避けられるたあ、成長し  
たな。こいつよりは上手だぜ」

彼が指さしているのは、気絶している男子生徒。

「ありがとう。でもこんなことをしても、あなたの罪は重くなる一  
方よ？　あなたは今誰に向かって拳を振りかざしたのか、もう一度  
よく考えてごらんさい！」

「生言つてんじゃねえぞ！　弱虫の神山がよ！」

幾度と無く拳を振りかざす。しかしかすりもせず、いつしか彼の  
口からは息切れが聞こえてきていた。

「なんでだ！　なんで当たたらねえんだ！」

「あーあ、避けるのも疲れてきたわ。そろそろ終わりにしてくれな  
いかしら？」

ドン。

彼の体から爆発音が轟き、彼は直立した姿勢を保ちながら崩れた。

「どう？　昔のいじめ相手にいじめられる気分は？　楽しいでしょ  
う？」

神山はそう言いながら彼の腕をつかむ。彼の体が震えはじめる。「な、何を……」

神山は依然として気絶したままの男子生徒を一瞥してから口を開いた。

「伊藤君、親から与えられた手をこんなことに使ってはダメでしょう。十分に反省なさい」

次の瞬間、彼の腕は消えた。血が落ちたりすること無く、まるで元から無かったかのようにそのまま空間から存在を消した。そして、日も暮れかけた校舎裏、男子生徒の悲鳴だけが響いた。

次の週。

カナメが登校して来ると、山岸と姉星は待つてましたとばかりにカナメのカバンを下ろし、肩に腕をかけてきた。姉星の包帯はもうなくなっており、完治したようだ。

「伊藤が自宅謹慎になったらしーぞ」

山岸は有無も言わず話題を始めた。カナメはさして驚きもせず、返す。

「ほう。まあ結構悪やってたからな」

「それもそうなんだが」

山岸はバトンタッチ、と姉星に目で合図を送った。

「なんか、学校に恐喝の事実が伝えられたときには右腕が無かったらしいの。しかも本人が出頭」

「とうとうあいつも悪いことをしすぎて、頭がおかしくなったか」

「誰だってそう思うよね」

「おい、ちよつと待て」

腕が無い。その事実の重大さに脳が反応するまでに時間が少しかかった。

「腕が無い？」

「そう。腕がまるごと。わきのところからまるごと。しかも、血は

出てなかったんだって。」

カナメは思った。そんなことが出来てしまいそんな疑いがかかってしまう人間は今一人しかない。するとそれに追いつくように山岸が話しかけてくる。

「さあ、三条カナメ君、誰の仕業でしょう?」

フルネーム、そしてクイズ番組のような言い回しがカナメには鬱陶しく感じられたが、その雰囲気は笑ってツツコミを入れられるようなものではなかったので、真剣にレスポンスをする。

「合っているかどうかは別として、神山以外の答えが思い浮かばない」

「そうだろう、そうだろう。で、どうしようか」

「もう腕が無いもんね……伊藤の奴、ああ見えて実はそんな悪い奴じゃないのに」

そう言う姉星の目にはうつすらと涙が浮かんでおり、カナメも同情してしまふ。

「腕の件については、俺らが見ていなかった状況で起きたことだ。

仕方が無い。だからこれからのあいつのケア、そして敵という敵と戦うべき時を考えよう」

何気なく山岸が「俺ら」と言い、カナメだけを責めないようにしているのが、カナメにとって嬉しくてならなかった。だが、敵は今までの事件からすると常識では考えられないくらい強大であるし、まだまだ強いかもしれない。戦うべきときはいつなのか、そして来てしまうのか、この先のすべてが重く、カナメたちにのしかかっていた。

7 (後書き)

神山の強さの底はどこなのか……次回もお楽しみに。

伊藤の謹慎期間は10日間のはずだった。ところが、10日を過ぎても登校する気配は無かった。教員側の説明では、本人の精神状態がまだ学校に来られるようになるまで回復していない、とのことだった。伊藤はカナメ・姉星・山岸と違い、B組の生徒なので細かい事情は違つかもしれないが、だとすれば神山は悪童をそこまで陥れたということになる。

「伊藤、学校来ないね……」

2限が終わった後の中休み、次の生物の移動教室へA組の皆が向かっていった途中、姉星はつぶやいた。横にいたカナメはそのつぶやきを聞き、言った。

「そりゃ、腕をいきなり失ったらショックは大きいだろう」

「それはそうだけど」

その時、入れ替わりで生物の授業を終えたC組が向かってきた。その中に友達と仲睦まじく話している神山が姉星とカナメには見えなかった。C組の行列が見えなくなった後、姉星は溜息まじりに話を再開する。

「なんかさ、みなみって高2になってから変わったよね。高1のころも、あんな風に明るい子じゃなかったのにさ」

「いや、変わったんじゃない、変えたんだろ」

「そう、だよな」

カナメの言ったことは確かにそうだった。自分を生徒副会長の身分に導くところから始まり、今に至るまで彼女は自分の周りの環境を何らかの力で変えてきた。その時の彼女は余裕の表情以外の表情を見せないが、実は見えないところで必死になっているのかもしれない、カナメはそうも思った。

「みなみの次のターゲット、涼ちゃんかな、春村かな。涼ちゃんは服装検査とかでいろいろ手が打てそうだけど、春村はそもそもサボりだからなあ。家にいるような人間を罰せるわけが……でも、その常識を打ち破ってきたのがみなみだからね」

「どっちからのやら見当がつかんが、最善を尽くすしかないだろ」  
「うん、そうだね」

二人は会話を終わると、生物教室へと入っていった。

「本日の生徒会を始めます。礼」

「今日は特にこれという議題が無いから、各学級の状況報告を、」  
「待った」

をかけたのは、神山だった。

「ん、何だい」

嫌な予感はずつつも、その感情を表に出さないようカナメは柔軟な対応をする。

「私から提案が」

見えない「えー」が生徒会委員達の顔に広がっていく。

「先日の、アルバイト取り締まり法案の件については失礼しました。今回は前回の失敗も踏まえて、実施が現実的であることをベースにこの法案を立てたいと思います」

肝心の内容に皆、そして別のところではありながらも、カナメの興味が集まる。

「全校朝礼での服装検査です」

「（来ちまったか）」

神山の銃口の先は涼姫に向けられていた。

「というわけで、服装検査が通った」

生徒会は終わり、家へ帰り着くとカナメは真っ先に部屋に戻り、

携帯で姉星に電話をかけてこの事項を伝えた。

「マジで？ あちゃー、涼ちゃんには気をつけるよう言っておくわ」

「まずはそこからだな。頼む」

電話を切り、カナメは大きな溜息をついた。

神山の強さはここまでで十分、わかっている。今回のコンセプトはその被害をできるだけマシにする、というものだ。涼姫がこれを信じるか、信じないかは別として知識として持つておくことに無駄は無いはずだ。

カナメは何か大きな任務を果たし終えた気分になり、ベッドに横たわると晩飯まで寝てしまった。

「おはようございます、生徒会本部です」

週が変わり、朝礼台で声を張り上げているのはカナメ ではなく、副会長・神山みなみだった。どちらかというと副会長として朝礼台に立ったというよりは提案者としてのほうが大きいのだが。

「それでは各学級の生徒は出席番号順に並んでください」

各学級の生徒会委員がまず出席をチェックし始めた。遅刻をした生徒が知らんふりで列に勝手に入っていく。それも神山は見逃さず、「遅刻した生徒は罰掃除をしてもらいます。後で生徒会室に来なさい」

と号令、そしていよいよ服装チェックの方法が伝えられた。

「それでは服装検査の方法について、各学級の生徒会委員にもう一度説明をします。服装検査は採点方式です。髪型20点満点、上半身の制服をはじめとする身なり35点、同じく下半身35点、靴・靴下等足に関する身なり10点で採点します。採点は減点法で行ってまいります。つまり上限は100点ですが、下限は底なしです。くれぐれもファッションセンスではなく、当学園の服装規定に従っ

て採点するようにしてください。採点方法は以上です。後ほど生徒会のほうで集計を行い、40点以下の生徒は後日呼び出して罰則に従ってもらいます。それでは採点を開始してください」

神山はゆっくりと朝礼台を降りた。使い終わったマイクを受け取る。皆がガヤガヤと騒ぎ、ある者は開き直り、ある者はこっそりと委員が回る前に直している。

こうして全校を使った復讐は行われていった。

2年A組では涼姫がいよいよ服装検査を受ける番になった。担当は水川である。

「涼姫さん……」

大目の採点をしようと心がけている水川もさすがに絶句した。大目の採点と言うのは冗談でもなんでもなく、採点も折り返し地点まで来たと言うのに、まだ一名も罰則対象者が出ていなかった。ところが、涼姫の髪は脱色、そして規定では厳禁とされているメイク、上下ともに規定外の服装、そして靴も学校指定の革靴ではない。

とはいえ、水川のことだからこれでも結局は大目に見てくれるだろう、そうカナメは思っていた。ところが、悪魔はそれをみすみすと見過ごしてはくれなかった。

「あら、水川さん、採点が甘いですね」

水川の後ろには、神山が立っていた。カナメは体が震え始めた。怖かった。そこまですべて自分の思うとおりに復讐を完成させようとする、否、させている神山が怖かった。

「他のクラスは5〜10名罰則対象者が出ていますよ？ まあ、涼姫さんがどうして50点？ これはどう採点しても0点は下回りますよ？」

「各学級の採点は各学級の生徒会委員のほずです。神山さんが口出しする権利はありません」

いつかのこともあり、水川は懸命に抗議をする。

「それは厳正な採点をする生徒会委員の場合です。あなたのような方が採点しては、この法案の意味がなくなってしまう。規定外の服装をしている生徒を是正するためにしているんですから、むしろ罰則対象者ばかりになってもいいはずですよ」

「じゃあ、そ、そんなに言うなら神山さんが採点すればいいでしょう！」

名簿を渡して水川は列に戻った。

それを見送ると、神山はにこりと微笑みを浮かべ、名簿の涼姫の欄の「50」という数字の隣にマイナスをしっかりと、付け足した。

8 (後書き)

涼姫への復讐はどんなものになるのでしょうか。次回もお楽しみに。

次の朝礼。先日の服装検査の採点結果が出たそうだ。また神山は朝礼台に立ち、クラスランキングを読み上げる。体育祭の優勝発表ならまだしも、このようなものの結果を聞いても誰も驚きも喜びもなかった。

「それでは個人ランキングに参ります」

神山のその平然な発言は、例によって学校中を驚かせた。

「まずは優秀者上位30名」

そして淡々と、該当者のクラスと氏名、得点を読み上げられていく。

「次に……罰則対象者50名」

どういつつもりなのか、神山は罰則対象者を一人一人ゆっくり読み上げていく。そして1位に輝いてしまったのは、

「2年A組、涼姫佐和子さん、-50点」

笑いは起こらなかった。

罰則対象者は星の数ほどいても、マイナス点を、それも50点などを付けられている生徒はそうそういなかった。涼姫の格好は確かにマイナス圏内だが、とはいえ他のものの採点基準を考えると、それも-20点が妥当な線だ。それを無視した神山の狙いはズバリ、「学期中、生徒会事務の手伝いを毎昼休み・毎放課後に行なってもらいます。対象者はまず今日の昼休みに生徒会室に來なさい」

神山復讐計画の残りの2人は大変難しい相手だ。涼姫佐和子は涼姫財閥の娘、春村はサボリ。涼姫は以前にも生徒会ともめたことがあったが、親の献金の効果もあってか、理事長を始めとする教員一同によって事件が揉み消された。また春村のような元々学校に來て

いない人間に、学校で罰則を与えるのは難しい。強大な力を持つ神山でさえも、その力を発揮する場が無ければ弱者に戻ってしまう。カナメとしてはそちらのほうがもちろん嬉しいのだが、神山の強さは能力はもちろん、場を作るために状況を改変できるところにもあるのだ。

「さて、涼ちゃんの場合はどうしましょう」

昼休み、姉星が紙パックのコーヒーを2つ持ってきて、カナメのところに来た。1つはカナメへのおごりらしく、カナメは礼を言ってそれを受け取って飲んだ。今頃神山は例の罰則の説明会をしているのだろう。同じ生徒会委員という立場、その裏でこの話題だ。

「いくら神山でも”場”を金の力に消されてしまつては手も足も出まい。まあ、神山のことだから、金の力をまた更に消す可能性もある。ひとかけらも油断できんよ」

「そうね」

「そうそう、涼姫は神山の話についてどう受け止めたんだ」

涼姫は真剣に考えている二人とは裏腹に友人と楽しそうに、お弁当をつついている。ということは、説明会も普通にサボっている。

「聞いてはくれたけど、信じてはいないと思う。確かに何もされない状況で信じられないんだよね。山岸は最初から案じてくれたみたいだけど……」

最後の文で姉星の頬が少しばかり赤くなつたように見えたのは、カナメの錯覚だろうか。

「まあ、そんなに効果に期待はしてなかったからいいんだが。確かに信じたところで、心の準備ができていくかどうかという話になるだけで、実際の神山との戦いに役立つかとは別問題だからな」

「うん」

こうして学園一の悪服装王に輝いても平然としている涼姫の姿を見られたのは、この昼休みが最後となってしまった。

次の月曜日、涼姫の突然の転校が生徒たちに伝えられ、その日に転入先の高校に転入されてしまったという。涼姫の家は売却されてしまい、どのような心情になったのか、カナメ達が知りたくても知ることの出来ない状況となってしまった。

とはいえ何故彼女がこの学園から姿を消すような事態になったのか、カナメ達は皆目見当がつかない、というわけではなかった。それなりの事件が起こったことは把握しているのだ。

その事件はこの日の終業後から始まった。

「帰りましょうか」

涼姫は女子の中でも友人が多いうちに入る生徒である。彼女が一声上げれば女子の集団は彼女について行き、集団下校を始めるのだ。彼女の一声に反応した女子生徒たちがそそくさと下校の準備を始める。涼姫もロッカーから教科書を取り出そうとした。その時である。

「えー、何で、何ですか！」

涼姫が叫びだし、泣き始めた。生徒はもちろん、生徒の質問に答え終わり黒板を消していた教員も驚いた。はっとしたカナメ達は涼姫のロッカーへ向かう。粉々に引き裂かれた教科書、それを見たときに固まったのは姉星である。

「どうした、姉星」

カナメは聞いたが、近くに涼姫がいることに気づき、姉星と山岸を廊下に連れて行きもう一度尋ねた。

「あの教科書に何か心当たりはあるのか」

「あれは……」

中学校の頃に意識が遡るのに十分な時間を空けた後、姉星は口を開いた。

「中学校のときに、あたしと涼ちゃんと春村が多用した神山に対するいたずらのはず」

神山の復讐の第一歩は同じ手口での嫌がらせから始まった。

「あ、あとは何をしたんだ」

山岸の声も震えが止まらない。

「上履きを隠したり、机の中に濡れ雑巾を入れたり……」

カナメも怖くなってきた。怖いのはこのいたずらではない。涼姫の性格からして、このような嫌がらせを受けた場合、親に相談する親にまで何か起こる可能性が出てくるのだ。

「どうしよう、どうしよう……」

姉星はパニックに陥り始めた。カナメはこの時ばかりは神山が許せなかった。復讐ではあっても、自分としては神山を守ったつもりだ。神山が苦しんだときも、姉星達が苦しんだときも、自分は常に苦しんでいなければならないのか。自分は何も間違っていないはずなのに。

「とりあえず落ち着こう。また明日になったらまた少し状況も変わるだろう」

そういつてカナメは山岸と泣きじゃくる姉星を連れて帰った。

次の日。確かに状況は変わっていた。靴下姿の涼姫が机で大泣きしている。そして彼女の足元には、汚れた濡れ雑巾。

その日のA組のホームルームでは担任が生徒たちを追及した。どのクラスでもそうだったらしい。これも理事長直々の命令なのかもしれない。そう考えると、カナメ達にはこれらの大人も味方としては映らなかった。

その日中に涼姫の親は来た。

そして、その次の日から涼姫は学校に来なくなってしまった。

「涼ちゃんのお母さん、トイレで亡くなったんですって」

「えー、マジ？」

1週間後、涼姫が転校したあとの昼休みの教室での会話だ。姉星の話によると、神山の親は、来たときに水の入ったバケツを応接室に通じる廊下でかけられ、最後は鍵のかかったトイレに母親が閉じ込められたそうだ。教頭は神山の母親を助け出した後、必ず犯人を見つけ出して謝罪させることを約束したが、未だなおその約束は守られていない。その約束が守られるより先に、復讐の手が来てしまった。

銀城学園のトイレはのぞき防止のためにドアの隙間のあらゆる所が詰められている。これが仇となり、涼姫の母親は水が詰まったトイレを知らずに流した時、止まらない水の中で命を落とすことになってしまった。

あれから姉星は1日欠席し、今日学校に戻ってきたばかりだったがこの話を聞いて、また頭痛がしてきたようだ。カナメは姉星に近寄ると、

「大丈夫か、保健室行こう」

そういつて姉星を保健室へと連れて行った。

A組を出て廊下に出ると、神山とすれ違った。そして姉星と神山の目が合う。神山は柔らかな笑みを浮かべると、目を反らした。これは涼姫への復讐の終結宣言にカナメには見えた。



9 (後書き)

次回もお楽しみに。

最後の一人、春村美枝子はサボりの高校生である。普段はバイト以外家から一步も出ず、たまに思い出したように遊びに外に出る。彼女がたまに学校に来ることがあるが、これも彼女にとっては遊びに出かける内にしか入らないのだろう。

神山が春村に復讐をするためには、彼女が登校したときを見計らってするか、外で非合法的に仕返しをするか、の二通りが考えられる。ただ彼女の今までのことを考えると自分の手を汚すようなことはしないだろう。そう考えると前者だろうか。いずれにしても次の魔の手は遠い……カナメ達はそう考えながら、涼姫の転校に憂鬱な思いを馳せながら下校していた。

「考えてみれば、あたし達はマシな方だよね、ちょっとした怪我で済んだんだから」

「そう、なのかな」

痛い目にあつたことを、本来なら大きな声で畜生！と叫びたかつた山岸だが、大切な仲間を2人も失ってしまった今ではそんな自分を逆に戒めてしまう。

「こんにちは」

いきなりカナメ達の横に並んだのは神山だった。3人はぎよっとする。

「3人で楽しそうですね。山岸くんも遅刻しなくなりましたし、姉星さんも最近バイトをやめているようですよ、健全な学校生活で何よりです」

「あ、ああ……」

とりあえず山岸は返事を返した。

「それでは、私は急いで行かなければならない所があるので失礼しますね」

そう言つて神山は坂を駆け下りてしまった。

まずい。

3人もさすがに伊藤、涼姫と失つてきて不幸の予感に敏感になってきた。すでに神山は坂の向こう、視界から消えている。3人は同時に走り出した。

息を切らして、彼女達は春村の家に着いた。とりあえず彼女と対策などについて話そうとインターフォンを押した。

「はい」

春村の母の声が出た。彼女の足音が近くなってくる。その時。

2階の裏側から爆発音、そして春村の母の悲鳴が轟いた。

「春村さん、開けてください！ 銀城学園の三条です！ 開けてください！」

まずは状況を把握しないといけない。カナメは開けられた扉から、靴を脱いで2階へと駆け上る。そこには春村が倒れていた。否、春村の形をした物が落ちていた。

早く救急車を呼ばなければならぬ。でもその惨状には目を見張るものがあった。姉星はもう泣きじゃくっている。もう耐えられな

い、という悲鳴を泣き声に出していたのだろうか。

「と、とりあえず、救急車だ！ 姉星も今泣かないで、山岸を手伝え！ おい、春村！ 春村！ しっかりしろ！ おい！」

もう、あたりには星空が皮肉にも綺麗に広がっていた。その皮肉な星空も3人は病院の中から見る羽目になってしまった。

春村は即死だったようだ。救急車に乗せられていったが、その救急車も諦めきつたようなサイレンを鳴らして走っていったようにカナメ達には聞こえた。

「くそ！」

山岸は病院内の消火器を蹴る。そういえば、山岸が暴力をふるったのは姉星の件以来だった。つまり、ここまで辛い思いを口に出したり、物に当たったりしないで来たのだ。それを考えると三条も「病院内の物に当たるな」とは注意したくても出来なかった。相変わらず、姉星は隣で泣いている。お母さんは遺体安置室の中に今、いる。

ここでも大人達は味方ではなかった。自分達がこうして辛い思いをしているなか、安置室の前に次々と葬儀屋が来る。資料を探し、遺体の損傷が激しいプランについて他の社員と話している。たくさんの人を失った今、もう山岸は我慢できなくなつた。

「お前ら大人は、いい加減にしろ！」

「三条くん、山岸くん、姉星さん、ありがとうね。あなた達がたまにたま訪ねてくれたことを、美枝子だつてきつと、喜んでるよ」

病院の帰り道、もう外は暗くて危ないというので、春村の母親に3人は歩きで送ってもらっていた。春村の母親は山岸が葬儀屋を追

い出したことを知ったときも怒りはしなかった。

3人はそれぞれ暗い面持ちのまま、それぞれの家へと帰った。

「おい、いい加減にしるや、殺人犯！」

3人の誰しもが神山にこの言葉を言いたい。ところが考えてみれば証拠は一つも無く、事実として爆殺されたということが残っているのみだ。

もう今となつては、彼女の方から罪を認めてもらうしか方法は無いのだろうか。

次の日、春村の不幸の知らせは教室に知らせられた。ただ犯人も手法も分からず、全校朝礼とまではいかず、通常の授業が行われた。3人はとても授業などを受けられる気分ではなかったが。

昼休み、うつむいた表情のカナメは神山に呼ばれて屋上に向かった。

「あ、三条くん、わざわざごめんね」

「うん」

返事に力が湧かない。

「前にさ、三条くん、私に復讐どうのこうの言ってたじゃない」

ストレートにその話題が来るとは誰が予想しただろう。カナメは顔を上げて、神山の顔を見た。目が合う。神山が続ける。

「私が何て返事したか覚えてる？」

「『言葉が過ぎる』だっけ」

「あー……それも言ったね」

そう返すと、神山は少し考えた顔をした後

「『決着を付ける』って言ったわよね、決着を付けたら生徒会委員をやめてもいいし、逆に決着を付けるまでは生徒会を離れられない、と」

「そうだったな」

「私、もう少しで生徒会やめるかもしれない」

「それは、決着とやらが付くからか？」

「そう。で、その時になったら」

神山はカナメから目を反らし、それはまるで、選挙前にカナメが彼女の教室に向かった時の外の景色を眺めていた表情で、

「三条くんには全てを、話してあげる」

カナメは屋上から教室へと帰ってきた。ついに真相が明らかになるのは、カナメとしては嬉しいことこの上なかった。ただ彼が引っかかったのは、「決着が付いたら」ということだった。まだ話してくれない、そんなことはどうでもいいのだ。この言葉が指すことはそれだけではない。

まだ、復讐は終わっていないのだ。

10 (後書き)

5人を不幸へと陥れ、復讐を終えたはずなのに神山の復讐は終わっていないという。あと一人は誰か？カナメか？それとも……

まだ、復讐は終わっていない。

じゃあ、次の復讐の矛先は一体誰に？

カナメか？ また山岸や姉星か？ 教員か？

誰にも見当は付かない。

神山の復讐劇の最終章が幕を開けた。

「なんかさ、全部終わっちゃったような感じがするよね」

姉星の声が響く、放課後の誰もいない教室。山岸と姉星とカナメだけがA組に残っていた。

「本当だよな」

山岸の音がさらに空しく、響く。

二人の声は空しいが、とはいえ復讐劇の目標とされていた人間が全て復讐をされ、これ以上こんな恐怖を味わうことは無いのだ、という安堵も含まれているだろう。重い口をカナメは開いた。

「まだ、終わっていないと思う」

「え？」

姉星と山岸が驚きの声を同時に上げた。

「彼女は当初から『決着』を付けられない限りは生徒会を離れないと口にしていた。そして、今日昼休み彼女は俺に『もうすぐ決着が付く』と言い放った。ということは、決着はまだ付いていないんじゃないか」

「何、そんなことを言ったのか、あの女……」

山岸は完全に神山が嫌いになったようだ。

「さて、今日はさっさと帰ろうか。もしかしたら最後の相手までも、俺らの手ではかなわないのかもしれないしな」

先日までの山岸ならこのようなことを言えば、怒ったであろう。

だが姉星から4人、誰一人も助けることも出来なかったという事実から言うと自分達ではかなわないというのは、当然の結論でもある。山岸もさすがに怒る気力をなくしていた。

帰り道、山岸や姉星と別れた後、カナメは水川と会った。

「よっ」

「うん」

久々に話すのに、水川は意外と素直な反応をしてくれた。

「なんかさ、水川にはすまなかつたな」

何だか、カナメはそう謝らずにはいられなかった。

「いきなり、どうしたの？ あの時私は私も熱くなり過ぎたんだから、気にしないでよ」

「でもさ、実際君の言うことが正論だったことを思うと、ね」

「正論だった？ どういうこと？」

そうなのだ。水川と別軸で行動していた自分達は神山の復讐劇にビクビクしていた毎日だったが、水川を始めとする一般生徒は何があつたのか分かるまい。

「実はね、今まで起きた5つの事件に全て関連性があるんだ」

そういつてカナメは中学時代のことから今までのことを全て話した。そして……何故かまだ復讐は終わっていないことも。

「次は誰に来るのか分からないから、あんまり神山の気に障るようなことは言わないほうがいいと思うぞ。まあ、もう決まっているとは思っけどな」

「うん、じゃあね」

水川と別れた。思えば、カナメが水川と帰るのはずいぶん久しぶりだった。

今日はさっさと帰ろう、と言ったのはカナメだったが、カナメは

今日中に何らかのことが起こると予測していた。よりによって今日、自分を呼び出してわざわざ話をしたからには今日何かが起こるのではないか。そう思いながらも時間だけが刻一刻と過ぎていき、床に就く時間となってしまった。

このまま、今日と言う日が過ぎてしまっているのだろうかという不安からか、なかなか寝付けない。その時、携帯電話がバイブレータを作動させた。この時間にEメールとは珍しい、そう思いながらも暗闇の部屋の中、携帯のフリップを開けた。

「新着メール 1件」

ボタンを押し、メールを見る。メールは水川からだった。

めふめがっこう

本文はたったの7文字で終わっていた。ちょうど先ほどまで抱いていた嫌な予感がカナメの頭の中を何度も、何度もよぎっていく。

「（これは、大変なことに巻き込まれているかもしれないぞ）」

問題は「めふめ」だ。意味不明な単語に当然ながらカナメは首をかしげた。ポーっとしていて、彼女の身に何かがあつたら大変だ。

とりあえず試しに「めふめ」と入れて英数変換を試してみた。「76

7」「767」「メフメ」「メフメ」「SOS」「SOS」

「（SOS！ これだ。『SOSがっこう』だ！）」

喜んでいる暇はカナメには無かった。「めふめ」を「SOS」に変換することすら出来ない状況に今、水川は置かれているのだ。ベッドから降り、服を着替えて階段を一段抜かしで降りる。

「あ」

忘れていた。もう一つ大事なことが。

カナメは「水川が学校で大変なことになっているようだ。すぐ学校に来い」と山岸と姉星に送った。そして、二人が起きていること

を願う。

自転車に飛び乗り、春村の事件の時と同じ満天の星空の下、カナメは自転車を学校まで走らせた。

真っ暗な学校。さすがに校門をくぐった先に入るのはカナメにも憚られた。するとそこに要請された山岸と姉星がフウフウと息を切らせて走らせてきた。

「カナメ！」

声は屋上から聞こえた。水川の声だ。

「おい、三条、これは水川の、」

と山岸が言うより先に、カナメは走り出していた。山岸と姉星もついていく。

最後の一人くらい助けたい。3人は今この同じ思いをかかえて、2階、3階、4階と走っていく。

そして、屋上の扉。

「待っていたわ」

その声は扉を開ける前にカナメ達の耳に届いた。

「あそこで悲鳴をあげているのは誰でしょう？」

非常事態なのに、神山の声は冷ややかだ。

「てめっ！」

山岸が神山につっかかっていく。それは勿論無駄だった。

「くっ」

見えない力に引き剥がされ、山岸は崩れ落ちた。

「神山、水川のどこが気に入らないのかは知らないが、とりあえず水川を離せ」

「嫌よ」

神山は有無も言わさぬ調子で即答した。

「水川さんは、ここで死ぬの。それは私が決めたんじゃないの。神様が決めたのよ」

「わかった」

カナメは大きく息を吸い込み、いつにもない大きな声を張り上げた。

「生徒会長命令だ！ 2年A組の生徒会委員水川を離せ！」

夜の学校にその声は響いた。

「お前、馬鹿か？ そんな大声で叫ぶな！」

という山岸の声をカナメは無視する。

「神山も生徒会副会長としてずいぶん人を従わせてきただろう。だが、お前にも上に生徒会長がいるんだ。たまには従う側に立ったっていいんじゃないか？」

柔らかい姿勢を最後までカナメは崩さなかった。

そして神山の反応は意外だった。

「もう少し楽な状態にはしてあげましょう」

水川の紐がほどかれた。だが、なお彼女は動けないようだ。

「とりあえず入ってください」

神山はそう言って屋上の扉を開け、3人は屋上に立った。

11 (後書き)

次回か次々回、最終話です。テンポがどんどん速くなってすみませ  
ん。暴走を自分でも止められないのが悩みです(汗)

誰もいない屋上で神山は話を始めた。

「三条くんだけでなく、山岸くんと姉星さんも来ることは予想していたわ。まずは最近のことについて話しましょう」

神山はあの表情で星空を見つめた。彼女は外の景色が好きなのだろうか。少し時間がたった後顔を下げ、話を始めた。

「あなた達は、今までの事件を全て私の中学の頃の復讐だと考えていたようですね」

また間を空ける。

「結果から言うと、それは正論です。あなたたちや、伊藤くん、涼姫さん、春村さんが都合よく同じ銀学に通う運命になりましたね。まあこの運命を作ったのは私ですけど」

「俺らが憎かった気持ちは分からなくてもないが、だからって、だからって春村を殺すことは無かっただろうが！」

「黙りなさい」

神山がそういうと、山岸の口は自然と閉じられた。

「物事には順序があります。それを無視しては何も始まりませんよ」

山岸の口封じのようなものを解いて話を続ける。

「私は中3の冬、あなた達にいじめられて学校に来られなくなった頃、能力に目覚めました。運命を変えることもできれば、人を殺すことだって出来る。いずれにしても自分の手を汚さずにいろいろなことができるのです。あなた達も強い念さえあれば、このような能力を手に入れられないわけではありません。まあ、そうは言っても普通の念じ方では到底かないませんが。」

でも、その頃の私にはそんな能力を使う以前に、社会復帰する勇氣やきつかけがなかった。もうお気づきの方もいるようですが、「場”が無ければ私の力は無と化してしまう。今では”場”を作るこ

とさえもできませんが、その頃の私には”場”を作ることまでは出来ませんでした。そんな私に何も知らずに手を差し伸べてくれたのは、三条くん、あなた」

「三条だって人殺しのためにお前を助けたわけじゃ、」  
山岸は固まった。

「二度目の警告ですよ？ そろそろ学びなさい」  
「続けてくれ」

カナメは続きを要求した。神山はうなずいて、それに答える。

「無事高校に進み、それからは不自由無い生活が待っていたわ。そんな私に浮かんだのが、この復讐劇よ。なにしろ、自分の手を汚さないでできるならしない手はないでしょう。そこで山岸くんから順に復讐をすることにしたんだけど、味方がいないこのままの状況では不利と思つて生徒会副会長選挙に出馬したの。まあ副会長が辞めるように仕組んだのも実は私だったんだけどね」

そこから彼女の野望は始まっていたのか。カナメはなるほど思つた。

「順番には意味があつたの？ 山岸、あたし、伊藤、涼姫、春村」

姉星の質問に、神山は答えた。

「あとに行くほど、程度がひどいわ」

「なるほど」

「話を戻すわね」

「そして、あなた達が見てきた通りよ。私は復讐劇を次から次へと行つた。怖いものは何一つ無かつた。誰もが私に従つてくれるんだもん。でもね、それでも恐れているものはあつたわ」

「一つは、三条くん、あなたよ。あなたは私のこと、自分でも気づかないかもしれないけど結構よく知っているわ」

「そうなのか」

としかカナメには反応のしようがなかつた。

「そしてもう一人は水川さんよ。女子でも私に反発して署名運動を展開したりしてね」

「で、何故水川がいる」

カナメの質問を無視してはいるが、答えはしっかりと返した。

「『保健室登校の身分はどこへやら』」

水川はビクツとした。

「これは、さすがの私も怖くなった。いくら能力を持っていても昔のトラウマを消すことは出来ない。昔のトラウマがあってこそこの復讐計画があったから。じゃあどうするか？」

神山は笑い出した。

「水川さんを殺すまでよ」

そういうと、神山は水川の頭に力を加えた。水川の頭が、屋上の地面へと……

落ちなかった。カナメが受け止め、ゆっくりと地面に水川の頭を降ろした。

「三条くん、やめてくれるかな？ 恩人には痛い思いをしてほしくないんだけどな」

そういうと、カナメの頭が痛み出した。

「うっ、くうっ」

「私は、初めて自分の手を汚してまでして水川さんを殺そうとしているの。水川さんも感謝なさい？ 原因不明の死なんじゃなくて、立派に私に殺されたって新聞に載るんだから。犯人は謎の生徒副会長ってね。あっはっはっは、あーっはっはっは」

神山の笑い声が銀城学園を包んだ。

このまま、また銀城学園の生徒が一人減るのか？

このまま、水川も殺されるのか？ 見殺しにできるのか？

そう思ったカナメの決断は早かった。

「やめるー！」

頭痛はどんどんと激しくなっていく。それを我慢してカナメは叫んだ。

「手を汚すとか汚さないとか関係ないんだ！ その前に水川を殺すのをやめろ」

「そつよ！」

姉星も同調した。

「うるさい！ 黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！」

姉星もまた固まった。

「三条くんは私の気持ちわかるでしょ？ わかってくれるよね？

わかってくれないと悲しいよ」

神山の目が狂気に満ち始めた。

「全員、死ね！」

神山の目は光り、水川に向かっていく。

「や、やめろ」

カナメが言っても神山の足は止まらない。頭痛ばかりがひどくなっていく。

「やめろー！」

そういつとカナメは神山を蹴り飛ばした。神山が崩れ、倒れる。

山岸と姉星も意識を戻した。

「俺は、か、神山のことは嫌いじゃない。だが、お前が、水川を殺そうとするなら、話は、別だ。俺はお前と戦ってでも水川を守る」

頭痛と戦いながらも、カナメは言い終えた。宣戦布告はしたが、頭痛との戦いで精一杯だ。

「何を言っているのよ」

神山はカナメに顔を向けた。

「あなたの気持ち私が私以外に向くなんて、許せるわけがないじゃない。3人で、かかってきなさい！」

銀城学園の屋上。1対3の最終決戦が始まった。夜が明けるには、

まだまだ早い。

12 (後書き)

次回、最終話……だと思えます。お楽しみに。

ステージが変わった。屋上の周りのフェンスが音を立てずに校庭へと落ちていった。

そして、神山は水川の処刑台を作り上げたのだ。いつしか、カナメの頭痛は治っていた。

「私は三条くん助けられた。故に、なるべく三条くんの願いや希望は聞き入りたいと思ってるの。今の私にできないことはほとんどない。だからしてほしいことなら聞いてあげる」

神山は優しい声音で、そう言った。

「それなら……」

水川を助けてくれ、とカナメが言う前に神山が断った。

「それは別問題。水川さん達に仕返しをために与えられた力を使う場を、あなたが与えてくれた。そのことに感謝しているの。それを実現させたら、あなたへの恩も無くなってしまい、矛盾が起こる」

「そうは言っても」

「だから私は自らの手で水川さんに復讐をしようと言っているの。もちろんその後は少年院なり拘置所なり刑務所なりで現代人類のルールに則って罰を受けさせてもらうわ」

「衝動的に殺し、罰を受けるなら俺だって文句は言わない。なのに罰を受ける所まで計画ができているのならば、今すぐこんなことをやめろ！ お前のことを思っている親達にも良くないだろう」

「あら、お涙頂戴って所かしら？ そんなことで慰められる様なら今頃こんなところまで行動を踏み切っていないわ。まあ、そんなところが三条くんらしいわ」

「そんなことを言われても嬉しくない。いいから水川を離せ」

水川はとうとう泣き出している。

「うるさいわね、この女は」

神山がそう言った瞬間、水川の声はカナメ達の耳に届かなくなつた。水川だけが必死で何かを叫んでいるように見える。

「さて、手短に終わらせましょうか。あなた達も疲れているんですよ」

一筋縄ではいかない。そう思ったカナメは方向性を変えることにした。

「なあ、ところで」

神山が手を止め、カナメを不思議そうな目で見つめる。

「何？」

「その能力とやらは何でも出来るのか？」

「もちろん」

「じゃあこの学校の校庭の真ん中の鬱陶しい木を根こそぎ消すこととかは？」

「基本的に強い強い怨念が無いとダメ。あそこに春村さんがいたりしたらできるわ。山岸くんでも出来ないことは無いけれど、逆に疲れるわ。怨念が無い分体力も消費するのよ」

三条には恩があるのか、柔軟に対応してくれる。この部分に山岸は違いを感じた。三条なら弱点を調べて、いい方向に向かつてくれる。ここで俺と姉星は口出しをしてはいけない。変に気を立てたら自殺行為だ。あくまで、自分達の出番の時にしか出しゃばってはいけないんだ。

姉星と山岸の目が合った。互いに同じようなことを考えていたようだ。山岸は自分の唇に人差し指を立てて、姉星にアイコンタクトを送る。姉星も了解したように、首を軽く傾けた。うなずいているのだろう。

三条の情報収集はまだこれからだった。

「じゃあもし俺を殺そうとすると、どうなるんだ？」

意味深なふりをしないよう、笑いを含みながらカナメは聞く。

「そうね、私の身が減ぶかもね。そこまでいかなくても私にとっては痛手。精神的にもね。あなたは大切な人ですもの」

よし、これでとりあえずいいかな。

カナメはありがとつ、と礼を言い、とりあえずもう一度お願いを試してみた。

「水川をどうにか、許してくれないか」

「だから、それは無理。殺した後で供養はいくらでもしてあげるからそれだけのご勘弁」

神山は微笑む。カナメは後ろを振り返り、山岸と姉星を見つめた。それで何かを理解したようだ。山岸が口を開いた。

「ふざけんなよ、水川を殺されてたまるか。供養なんか考える前に思いとどまれ」

「うるさいわ」

「水川を殺すんなら、俺を先に殺せ」

「私もよ！」

姉星は踏み出た。

思わぬ展開に神山の怒りは高く、高く昇っていく。

「いい加減に邪魔するのよしてくれない？ 鬱陶しいだけなの」

先に山岸に手が伸びた。その手は見えない手だった。山岸は空中に放り投げだされ、屋上の地面に何度も、何度も叩き付けられた。

痛みが強すぎて、悲鳴が声にならなかつた。10回近く叩き付けられた後、その手は運動を止めた。

「……！」

「声にもならないじゃないの。そんなんじゃ殺されるまで持つかしら。ふふふ」

次は姉星に手が伸びるのだろうか。この間受けたような暴力を、いやそれ以上をまた彼女は受けなければならぬのだろうか。そして水川をこのまま見殺しにできるのか。そう思っているうちに、スロームーションのように神山の視線が山岸から姉星へと移っていく、

移っていく。

「姉星は関係無い。だったら俺を殺せ」  
カナメは神山の前に立った。

「三条くん……？」

神山の笑みは消えた。

「何であなたまで邪魔するの？ 私を守ってくれたじゃない」

「それはこんな酷いことを考えることすらできなかった君のときだ。  
今の君には同情をひとかけらも注げない」

「どうして？ どうしてみんなで邪魔するのよ！ 中学のときも！

高校に入っても！ 復讐だって5人うまくいった！ もう一人、  
最後の最後にどうしてみんな邪魔するのよ！ なんで三条くんまで、  
私を陥れた人に味方するのよ！ どうして！ どうしてなの！」

神山は悲鳴をあげはじめた。涙がぼろり、ぼろりとこぼれ落ちる。  
まるで校門を泣きながら、駆け下りた頃のように。

「もういい」

神山は涙をぬぐったが、彼女の思いとは裏腹に、涙は止まらない。  
彼女にも思い通りにならないことはあるのだと、カナメたちには  
わかった。

「三条くんまで裏切るんなら、私はするべきことをするだけだわ」  
「裏切るなんて、人聞きの悪い言い方はよせ。謝罪なら僕の口から  
したはずだ」

「この女の、この口から聞いたことは無いわよ」

「お前が水川を謝れない状況にしていただけだろう」

「うるさいわ。もう三条くんにも消えてもらいましょ」  
そういつて彼女はカナメを見つめた。

何も起きない。

神山の顔が青色を増してくる。

「何で、何で……何ですよ！　なんで力が来ないのよ！」

それは彼女の言ったとおりだった。カナメには何の恨みも無い。

それどころか、中学のあの状況からただ一人の救世主として好意を持っていた。その証拠にうわべだけ「殺す」と言っているても、カナメの身には何も起こらないのだった。

「何ですよ！　私の計画を邪魔するやつなんか死ねばいいのに！」

「中学の頃の、三条の思いやりを忘れたのか？　受験中の忙しい中、お前のことを教員なんかよりもきちんと考えていた三条を殺すのか？」

また地面に叩き付けられることは覚悟のうえで、山岸は口を開けた。今度は神山は「うるさい」とは言わなかった。言えなかった。

その山岸の言葉もしっかりと神山の心の底に、突き刺さっていた。

「あああああああああああああああああああああああ  
！」

そう大きな悲鳴を出すと神山の涙は止まった。

「私の、負けだわ」

負けを認めた。

「あなた達の絆は私の恨みより強かったのね。いや、三条くんの恩のほうが私の恨みより強いことを実感したんだわ。私には三条くんを殺すことなんか到底、できない。やつぱり」

言葉を一度切った。

「人の優しさは、恨みなんかよりずっとずっと強いよね。怨念で何でも出来るなんて、大間違いだわ」

神山の体から光が発せられる。

「みんな、ありがとう。そして、ごめんね。私はきちんと罪を償います。私なんかのために、夜の学校に来てくれてありがとう。いや、私のためじゃないわ。水川さんのためかしらね。いずれにしてもお手数をかけて、ごめんなさい。能力の最後の使い道として、あなた達の服装・場所を元の所に戻します」

カナメ達の視界が薄くなっていく。そして、

「ありがとう」

視界は真っ暗になった。

## エピソード

いつもとは違う朝。

カナメはゆっくりと目を覚ました。学校に行くにはまだ早い起床時刻だった。確かに神山の言うとおり自宅の寝室で元の格好でカナメは寝ていたようだ。

なんだかさつきまでのことが嘘のようだ。今世の中はどんな状況なのか知りたい。ベッドでボーっとしているわけにはいかなかった。

朝食をいつもより早く済ませ、学校へ向かう。

校庭には神山が落としたフェンスが散っており、校内は誰がやったのかという話題で騒然となっている。犯人を知っている自分達としてはどう考えても、すすんで話題にできるほど楽しい出来事ではなかった。とりあえず昨晚のことは事実らしい。あと三つ。

教室へ向かうと姉星と山岸が先に来ていた。

「よう、カナメ。さつきはお疲れさん」

声をかけてきた山岸は腕を骨折したらしく、固定していた。ただの夢ではなかったようだ。カナメは安心なのやら、疲れなのやら分からないものを胸に抱えながら「うん」と返事をし、席に座る。

「なんか、三条には迷惑かけたね」

姉星は悪かったという気持ちからか、軽く頭を下げた。カナメは「いいよ、そんなの」と返事をとりあえずする。

とりあえず2人は無事のようにだ。あとは神山と水川のことだ。水川も登校してきた。教室に入ってくるときに目が合って、水川は立ち止まった。それから何か決心したような顔を見ると、教室に入って自分の席に荷物を下ろした。するとすぐカナメ達のほうへ向かっ

てきた。最初に口を開けたのは山岸だった。

「おう、水川、無事で何よりだぜ。それでこそ助けた甲斐があったつてもんよ」

「本当に無事でよかったね」

姉星は同調する。水川は山岸には腕に気の毒そうな視線を注ぎながら軽く謝罪をし、姉星には機械的に「どうも」と返事をして、カナメのほうに顔を向けてきた。

「昨晩はありがとう。そしてごめんなさい」

謝罪ならこの間したはずだ。カナメは不思議に思い、

「謝らなくていいだろう。この間も謝っていたじゃないか」

「ううん、それじゃいけないって思った。悪かったのはカナメに悪口を言ったことじゃない。まるでカナメが山岸くん達のことを考えずに、神山さん寄りの考え方をしているみたいなのをつい、言っちゃった。ごめん。許して」

この長い言葉に今までに溜まった謝りたい、という思いが詰まっていた。

だが思いはそれだけではなかった。

「それどころか、私のこと考えてくれたんだね」

話が思わぬ方向へ行きそうだ。朝のホームルーム前の教室。

水川の言葉を否定できない自分もいる。

「カナメ、好きだよ！」

そういうと、水川はカナメに抱きつき、目をつぶった。事情を知らないものから見れば、注目的である。カナメは目のやり場に困った。山岸と姉星はニヤニヤしているばかりである。

「（てめーら、ニヤニヤしている暇があったら、この状況を何とかしろアホ）」

とは思ったものの、水川にこういう風にされているのも満更ではなかったのがカナメは恥ずかしかった。

あの事件の後の話をしていくことにしよう。

あれから神山みなみは突然姿を消した、ということに学校側ではなった。もちろん大多数の生徒会委員は嬉しそうな顔をしているが、平然な表情を出来ずにカナメと水川だけが困ってしまった。

久々に何の議題も無いいつも通りの生徒会。カナメは心なしか普段よりも明るい委員たちを一瞥して言った。

「最後に委員より連絡は？」

「はい」

手を上げたのはクラスメイトの水川だった。

「今週転出された、副会長の後任人事の件です」

いつか見たことのある風景が、繰り返されていた。ところが、繰り返されることはなかった。

「いや」

それはカナメの精一杯の神山に対する同情だった。

「選挙はよろしう。今年度いっぱいには副会長無しでやっていきましよう」

副会長席には花束が置かれていた。

異例の副会長無しの生徒会となったわけだが、その後は何事も無く年度を終えて全員が任期を満了した。人生最初で最後の高校の生徒会長という大きな仕事。こればかりは小さいとは口が裂けても言えなかった。から三条カナメは退いて高校3年、受験生となった。

高3になったカナメだが、通常の生徒会委員にまたなってしまった。自分の1つ年下が生徒会長になった生徒会にいるのは少し複雑

な心情である。実権を持たない高3の気持ちを味わう。

受験シーズンともなると、いつも以上に皆授業をよく聞くようになる。だが、神山のときのような事件が、いや正確にはその後の復讐も考えてだが、とにかくクラスの中の雰囲気が悪くならないように生徒会委員三条カナメは努めた。

高3のバレンタインはセンター試験後という微妙な時期にもかかわらず、

「もうすぐ二次試験だね！ 頑張れチョコレート！」

などという訳の分からない紙とチョコレートをカナメはもらった。いわゆる恋人に近くなっているようだ。

さらにその後受験も無事終わり、水川と同じ大学に進学することになった。場所が場所のため、上京し親元を離れて水川は一人暮らし、カナメは下宿している。山岸は地元の公立大学へ、姉星はそもそも進学しなかったという。

ある日、下宿先に戻ってきたカナメのポストに手紙が入っていた。ダイレクトメールすら来ないポストに来た手紙である。カナメは用心深く裏返しにした。

「この度二人は結婚することになりました！ これからも二人支えあっていききたいと思います。」

五月吉日

山岸亮&美穂（旧姓：姉星）

今度はカナメがニヤニヤする番だった。  
引き出物は何だろう。そんなことを思いつつ、カナメは自室へと  
上がった。

## エピローグ（後書き）

ご読了ありがとうございます。

初めての作品にありがちな、とても無茶苦茶なオチです。文章力0の作った塊をここまで読んでくださった方には精一杯の感謝を。

これから中編1つ、長編1つの連載を予定しております。その時はまたよろしく願います。

ご批評等お待ちしております。

それでは失礼いたします。またお会いしましょう。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8150a/>

---

銀城学園物語

2008年11月7日09時06分発行